

空気を読む「宗教」とキリスト者： 山本七平の「日本教」再考

深 谷 潤

“Religion” of Reading Air, and Christians : Reconsideration of
“Nihonkyo” Written by Shichihei Yamamoto

Jun Fukaya

<抄録>

山本七平の思想における「日本教」の特徴と問題点について、特に日本社会におけるキリスト者との関係から考察する。山本は、日本教の特徴には、対象的認識が不足した非客観性や二人称が支配する世界観、人間を中心に虚偽と現実のバランスをとる思考形式等があると指摘する。日本では誰でも日本教の影響は避けられず、キリスト者も「日本教徒キリスト派」に陥ると言及する。これを避けるために、二人称的世界からの脱却と歴史意識の育成が必要である。

はじめに

「空気を読む」ことが、日本社会において、大なり小なり必要不可欠であることは、今も昔も変わらない。若者の間で交わされる略字「KY」、学校の教室内での「同調圧力」や共同体における「村八分」にいたるまで、日本社会のコミュニケーションの独自性は、ネット社会においても「炎上」に見られるように、本質的には変わっていないと思われる。キリスト教の教会や学校、園などでの人間関係においても、空気を読むコミュニケーションは、例外とは言えないだろう。誰かを責任ある立場に選ぶとき、何かの企画やアイデアを提案するとき、当番を選ぶとき等、話し合いに出席しているメンバーによって醸し出される、その場の雰囲気は、合理的で根拠に基づいた言葉による説得よりも、

「～さんがかわいそう」、「～さんのために、ここは一肌脱ごう！」のように情緒的な要因が重大な決定を左右することが少なくない。

さて、このいわば社会学的な特殊なコミュニケーション形態を「空気」として研究対象とした人物の一人に、山本七平がいる。彼は、この空気のある種の宗教と読み替えて、「日本教」と命名している。彼の立場は、賛否両論ある。代表作の一つに『日本人とユダヤ人』¹があり、1970年当時ベストセラーとなった。彼を丸山真男、柳田國男等と並んで評価する者（赤祖父哲二）もいれば、研究者としての資質を疑う者（浅見定雄）までいる。山本は、「日本教」は世界最強の宗教であるという。そのため、日本人のキリスト者は、その影響を避けることができず、「日本教徒キリスト派」²であるとまでいう。

本稿では、キリスト者を含め、日本人のコミュニケーションについて、50年近く前に登場した「日本教」について考察してみたい。紙面の都合上、「日本教」の意味や特徴、さらに日本教への批判に関する説明が中心となる。ただ、山本の言う「日本教徒キリスト派」とならないために必要なことについて多少なりとも考察を試みる。まず初めに「日本教」の先行研究ならびに、山本が語る「日本教」の特徴について説明する。

1. 「日本教」に関する先行研究

「空気を読む」ことを特徴とする「日本教」については、山本七平（ペンネーム：イザヤ・ベンダサン）を代表とするが、それ以外にも山内健生、こやまもと、小崎健吾、多波まこと、石田一良等が「日本教」を論文のテーマに掲げている。彼らは山本の日本教の立場と直接関連性が薄いので、本稿では詳細は割愛するが、それらの特徴を簡潔に表現するならば、仏教や神道との関わり、村社会における血縁関係が主な要素と言える。

また、日本教と命名してはいないが、「創唱宗教」として日本人の宗教観を定義した、阿満利磨³や、「世間」の研究をした阿部謹也⁴も看過できないが、ここでは割愛する。

山本七平の「日本教」に直接言及する最近の研究では、東谷暁の『山本七平の思想：日本教と天皇制の70年』（2017年）がある。特に第4章で、「名著

＜『空気』の研究＞はいかにして生まれたか」を割いている。「空気」の源泉に、神の臨在を日本人が見ていること、それがアニミズムを基盤とした家族的相互主義に基づくことを指摘し、また、自然を神とする「汎神論的神政制」について説明している。西谷幸介は、「学術論文いわゆる『日本教』について—日本的習合宗教の探究との関連で—」（1999年）において、山本に対する批判（浅見定雄『にせユダヤ人と日本人』1983年）に触れる一方、外国人からの高い評価にも言及している。（B.J. シュラクター「日本人とユダヤ人」評）日本教の本質が「恩・施恩」の血縁関係を絶対化する「二人称」の世界にあることを説明する。これは、森有正の「二項結合方式」（『経験と思想』）や和辻哲郎の「間柄存在」（『人間の学としての倫理学』）に通じる概念であると言う。彼は、「日本教」は国民性ではなく、文化価値であると位置付けている。⁵

二人称に関しては、篠井保彦の「神託と予測（18）山本七平の日本教をめぐって」において、日本の社会秩序が、神の無い「自然法」における「恩・施恩」に基づいていること、さらに人間関係性のみで判断する日本秩序の危うさが言及されている。⁶ 赤松宏は、「西洋と日本の相違—言葉、理論、思想、方法論について（4）—」において、「山本の日本教における二人称の世界を日本教の代表的人物「恩田木工」を紹介している。また、その世界における「裸の付き合い」が自然であり、無心、無我と同義であると言う。⁷ 中島誠は、「“日本教”を越え行く—新たな21世紀を生き切るために—」において、日本教の特質を、勝ち負け、損得の論理だけで成立していると言及する。⁸ これは、日本教をプラグマティズムと位置付けるに等しい。また、日本教には、時間が欠落していると言う。短絡思考で、徹底した自己中心主義であるという。⁹

浅見定雄は、最もラディカルに山本を批判した『にせユダヤ人と日本人』（朝日新聞社1983年）を著した。これについては、後述する。

2. 「日本教」の意味と特徴

山本七平は、「イザヤ・ベンダサン（Isaiah BenDasan）」という「ユダヤ人」を装ったペンネームで著作活動をしていた。『日本教徒』（イザヤ・ベンダサン著 山本七平訳編）（文藝春秋 1997年）のように、訳者として本名をのせつ

つ、著者は別人のように公にされていたため、長らく両者が同一人物であるとみなすことが困難であった。ここでは、山本七平に統一し、彼の主張する「日本教」について、説明、分析する。

彼が日本教について、まとまった形で説明した最初の著作は、先述の『日本人とユダヤ人』（1970年初版）である。全15章構成のうち、7, 8, 9章を割いて「日本教徒」の語源的説明や体现者、キリスト教徒との比較などの内容をエッセイ風に記述している。この本は、1971年第2回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞し、当時大きな話題となった。また、1975年には『日本教について』、1976年『日本教徒：その開祖と現代知識人』を著した。また、小室直樹との対談集『日本教の社会学』が1981年に出されている。さらに、日本教の本質的要素である「空気」について、『「空気」の研究』を1977年に発表している。これらの資料を中心に、山本における日本教の意味を以下に概説する。

日本教には、教義がなく、日本人も日本教徒であるという自覚がない。論理も規範も、神もなく、時間的感覚、つまり歴史意識もない。対象を対象として認識する発想もなく、事実と規範を混同して判断する。ただあるのは、事実を自分の価値観や思い込みで信じ込もうとする雰囲気、「空気」であり、それが自分の周りを取り囲み、ある種の宗教的雰囲気を形成している。これらの特徴を併せ持つ社会的特性を「日本教」と呼ぶ。

上記の特徴を以下の3点にまとめた。

(1) 教義がない。

本来的に、日本教を論理的に説明する言葉はない。神とは何かを説明する神義論もなく、 sacrament もない。言葉を自己の対象として考え、また、そこから自由になるという発想も皆無である。対象を対象として判断する認識よりも、対象への価値判断が先行するため、客観的に対象をみることができない。これらの思考的特性から、論理的に判断することが困難であり、判断基準が何であるかがわからず、自己矛盾に気づかない。このような日本人の思考におい

て、西洋的な教義は存在しない。¹⁰ この時点で、宗教学的な意味において、「日本教」は宗教とはいえないであろう。¹¹

日本教を説明する言葉がない、ことについて、多波は、それが日本人にとって「タブー」とされてきたと考えている。日本教の曖昧さが言語理解を妨げる要因となり、同時に日本教の「戒律」が「秘められたもの」であり、明文化すべきでないと思なされていた、と彼は考えている。しかし、むしろ日本文化の特性として、文脈依存度が高く、仲間内で了解可能なことは、できるだけ言葉にしない「高テクスト文化 (high context culture)」¹² であることの方が、説明しないことの理由として説得力があると思われる。

説明する言葉がないにもかかわらず、暗黙のルールが存在することを指摘する研究もある。先述の多波は、モーセの十戒にならって、日本教の十戒を示している。¹³ この戒めの最後にあるのが、「以上の掟は言葉と文章にしてはならない」(第10戒)である。これらの戒めは、集団の構成員の主観性の中でのみ伝達される徳目のようなものとして理解できるだろう。徳目自体が客観的な言葉として批判、分析の対象になることなく、一人一人の「思い」や主観的確信のなかで生き延びてきた価値観と考えられる。

日本教的世界観を提示したこやまは、日本教は、いくつかの世界観に基づく宗教思想である¹⁴ という。この世界観は、宇宙を中心とした秩序にのっとった人間を志向するものである。それは、人間の意図とは独立した「自然」を前提としており、秩序ある状態＝自然が基盤となる世界観であると言えよう。人間はその秩序を守り、それに従うべきであるという。また、それに従っているかどうかは、「主観的に確信」できることと「同値」である。すなわち、自分が確信していれば、すでにそれは秩序を守り、従っていることになるのである。この恐るべき主観主義、自己中心主義は、客観性を排除し¹⁵、論理的に思考する態度を必要としない。こやまは、「日本教の弱点」¹⁶ として、客観性、目的合理性、論理性の欠如をあげている。それらは、すべて主観的確信のみに依存する世界観から生じていると言える。

(2) 空気としての特性をもつ。

教義のかわりに、日本人の行動や判断の「原則」として機能するものに「空気」がある。¹⁷ 空気の定義は容易ではなく、山本本人も、「空気とはまことに大きな絶対権をもった妖怪である」と比喩を交えて説明している。¹⁸ また、「非常に強固でほぼ絶対的な支配力をもつ「判断の基準」であり、それに抵抗する者を異端として「抗空気罪」で社会的に葬るほどの力をもつ超能力である」とも述べている。¹⁹ 空気のもつ力は、その場に集う人間を支配し、山本は、「臨在感」と表現している。彼によれば、「たんなる物や言葉に（人を動かす）影響力を及ぼす能力がひそんでいるかのように感じてしまう心理的な習慣」であると言う。²⁰ 山本がしばしば用いる空気の事例に、第二次世界大戦末期の戦艦大和出撃に際しての、三上作夫参謀と伊藤整一司令長官の会話がある²¹。明白な事実やデータ、論理的思考を飛び越えて、誰が責任を負うこともなく、その場の空気で大変な決定が下される過程は、山本の言うように「超能力」でもあり、ある種、宗教性を帯びた出来事と言えよう。彼は、戦艦大和を一つの「人格」と見做し、それに神的な臨在感をもたせた物神論的発想に基づく決断を伊藤長官がしたと考えれば不思議ではない、と言及している。²² 東谷は、山本がこの臨在感のルーツには、日本人の宗教観がアニミズムに根を持つためであることを指摘する。詳細には論じられていないが、アニミズムの精神傾向をもつ日本人は、世界を自分と同類のものとして肯定的にみるため、欧米人のように厳しく突き放した批判的見方ができないと言う。²³ そのため、対象を相対的にみることなく、時には絶対化する。その際、人間は逆にその対象に支配され、縛られてしまうと山本は考える。それが、空気が人を支配する原則となるのである。²⁴

空気の持つ支配力の原因のもう一つの側面は、日本社会の原理をなす「親子関係」である。この親子関係は、血縁関係を基礎としながらも、そこを越えて、地縁関係すなわち「擬制の血縁関係」を、さらには国民国家の関係、究極的には天皇と国民との親と子の一体化のイメージにまで広げられる。この親子は、森有正の「二項結合方式」つまり、「内密な関係の中の二人の人間」の関係である。²⁵ この人間関係は、「俺」と「お前」と呼びあえる「二人称の世界」²⁶ であり、「人間に対する確固たる信仰が相互にある」ことを意味すると言う。²⁷ さら

にこの関係において、重要なのが恩に対する考えである。それは、人は「恩を受けた」ことに対する債務は常に追わねばならないが、「恩を施した」という債権を主張することはできないことである。つまり、子どもは親から恩を受けたので、それを返すことが重要（例えば親孝行）だが、親は子どもに恩を与えたことを自分の権利として主張することはできないのである。これは、権利を主張することが当然とされる西洋と違い、日本独特のものである、と言う。²⁸ この恩・施恩の関係は、人間が生まれながらにもつ秩序であり、「自然法」として、日本人が無意識に信じている日本教の根源であると考えられている。²⁹

空気は、先述のように、臨在感と親子関係の原則によって、支配力をもつ特徴がある。さらに、空気の非歴史性と非体系性について指摘したい。空気は、ユダヤ・キリスト教のような絶対的唯一の神との契約が存在せず、歴史的な時間意識がないところで発生する。歴史的意識があると、物事の善悪が歴史の審判を受けるといふ発想を正当化することになり、教義がないことと両立しないからである。善悪の判断が明確化されることは、ある種の規範を体系的に有することを意味する。空気はそのような体系を持ちえないところに特徴がある。³⁰ 体系はないが、特性は 3 つある。①空気の醸し出す雰囲気には、正当性がある。②その正当性を遵守することが求められる。③それを守らなければ、制裁が加えられる。³¹ それは、「社会的死」を意味する。空気に従うことは、ある意味で宗教的な「戒律」である。共同体からの孤立は、「仲間外れ」であり、日本社会では一種の「死刑」でもある、と指摘される。³² 従って、共同体の利益を守ることは、法律に従うことよりも優先されるのである。³³

（3）自然を基盤とする。

日本教の基本的概念は、人間と自然であり、人間が支点となって、世の中のバランスを取っている。山本は、日本教は帰するところ「人間教」であるとまで言い切っている。³⁴ 人間教の支点は、自然を基盤としている。³⁵ また、日本人にとっての自然は、西洋のキリスト教的世界観の人間に管理される自然ではなく、「自己の内心の秩序と社会秩序と自然秩序」をまとめた言葉であり、それらは一致したものである。³⁶ 日本人にとって自然がそのまま規範化される。自

然のままであるのがなによりよいとされるのである。こやまは、日本教的世界観の原理として、1. 宇宙は全く無秩序な世界から出発したが、「ひとりでに」秩序ある状態に移行した。2. 宇宙に存在する全てのものは、宇宙が秩序ある状態に移行していくのに伴って、「ひとりでに」発生した。と言及している。「引用者」³⁷ この「ひとりでに」は、「自ずと」であり、日本的な「自然」を意味すると考えられる。篠井は、「人間は生まれながらにして、ちょうど動物の本能のように、この秩序（ナツウラ）の法を体得している。」と言及している。この「ナツウラの法」が自然の秩序である。「人々己が心に誰が教えるとはなけれども、盗みをすればわるし、人に情をかけて哀れむはよし、生まれながらに善悪を知分くる知恵のそろう」。³⁸ この考えは、江戸時代の儒学者、貝原益軒の思想に基づく。貝原は、天地自然は秩序をもち、それが「自然の教え」であり、人の道の根本をなす³⁹、としている。また、自然は、施恩の権利を主張せず、人間は受恩の義務を感じべきである、と考えている。⁴⁰ ここにも、自然と人間の二人称的世界が展開している。

また、山本によれば、日本は、人間を支点とした天秤の世界に例えられる。皿の一方には、「実体語」で組み立てられた世界があり、現実を表現する言葉がのせられる。もう一方には、「空体語」による一つの価値判断によって表現された言葉がのせられる。山本によれば、日本が第二次大戦終了直前には、「無条件降伏」の現実をうけいれる、という実体語に対し、「一億玉砕」という空体語がのせられ、空体語がさらに積み増されて天秤がひっくり返ってしまったという。それが終戦であり、両方の皿から言葉が落ちてしまった。その時、日本人はすべての言葉を失い、「虚脱状態」となった。思考停止状態である。もし、人間が自然を土台としているのであれば、ひっくり返った天秤の皿をそのままにしても、天地は秩序を持っているのだから、善なる方向に物事は向かう、と日本人は信じ、なるがままに、なされるがままに、物事の成り行きを見守っていくことになる。戦後、GHQの占領政策が円滑に進んだ理由がここにあったと山本は考えている。⁴¹

3. 「日本教」に対する批判と考察

これまで日本教の意味や特徴について説明してきた。次に、日本教に対する主な批判を紹介し、さらに3つの観点から考察していきたい。

浅見定雄の『にセユダヤ人と日本人』は、日本教の前提自体を批判するものである。彼は、山本の研究者としての資質と、語学力に対する批判を軸に、日本教そのものは存在しない、と言い切る。⁴² 山本は、ギリシア語の「ユーダイオス」をユダヤ人・ユダヤ教徒の両方に訳しているが、「ユーダイオス」は、ユダヤ教徒の意味にはならないと指摘する。ユダヤ教徒は、別に「ユーダイスモス」という言葉があり、山本の解釈はでたらめであるという。よって、この解釈に基づく「日本教徒」も存在しえないと結論付ける。

このような浅見の山本に対する批判は、日本教を提唱する山本の研究姿勢への批判としては妥当するといえる。しかし、「日本教」の内容自体に対する批判には必ずしもなっていない。西谷がいうように、「日本教」は外国人にとって日本人を理解する上「よく練られた思想」であり、「説得力をもっている」と評価されている面もある。⁴³

次に、「日本教」に対して3つの観点から考察する。

第一に、日本教の非客観性についてである。これは、(1) 教義がない、ことへの批判と呼応する。例えば、こやまは、キリスト教と比較して、主観性と客観性との「緊密な連関」は日本教的世界観には見いだせない⁴⁴と指摘する。また、篠井は、日本教において、「すべて人が基準」となり、客観的に黒白をつけることができない、と言及する。⁴⁵ 原理原則がなく、論理性を欠くこと自体に特徴をもつ日本教において、これらの批判は当然といえる。主観と客観という西洋の伝統的な認識論的カテゴリーは、自分自身独立した存在と、他者や対象という異なる存在の区分けにおいて、前提となる視座である。しかし、日本教は、その枠組み自体を設定していない。この特殊な認識論は、次に指摘する「空気」の支配の土壌を準備することになる。

第二に、日本教の二人称の世界についてである。「お前」と「俺」の「裸の付き合い」で腹藏なく理解し合えることを、根拠もなく信じ込むこと、対話に

よる対立を避け、共感することを重視する態度が、この世界を支配している。根源には、親子関係における「恩・施恩」がある。日本教は、その関係を自然と人間にまで拡大し、すべての困難は、「自ずと」解決する、と漠然と信じる傾向をもつ。これは、人間の責任や主体性の放棄を促す。共同体において、だれも責任を問われないのは、「みんな」が決めたことであり、自然とそういう結論になったからだ、と納得させられる。戦争直後、東久邇宮稔彦首相は、施政方針演説において、「事ここに至ったのは無論政府の政策がよくなかったからであるが、また国民の道義のすたれたのもこの原因の一つである。」と述べ、「一億総懺悔」を主張した。⁴⁶ その結果、戦争責任が曖昧にされ、軍の主要な立場にあった者に対する個別の責任を問うことなく、国民全体に責任を転嫁した。連合軍による東京裁判あったが、日本人自らが戦争責任を問い、その態度を示した例は皆無と言えよう。この例から分かるように、二人称の世界は、個人としての人間の在り方を阻害し、主体性と責任を見えにくくする世界観であるといえる。

第三に、天秤の比喩の今日的有効性についてである。山本は、人間を支点とした天秤の皿に、「実体語」と「空体語」を載せるモデルで、日本教徒の基本的ものの見方考え方や態度を説明した。先行研究では、あまりこのモデルに対する批判や考察が見当たらない。彼の説明では、空体語に多くの言葉が載せられて、天秤がひっくり返り、思考停止の状態になったという。その根拠は示されていない。学徒出陣し、戦争の犠牲になった当時の大学生の手記を読むと、死んでいった特攻隊の兵士たちは、世界や日本の情勢がよくわかっていて、無駄で愚かな戦争をしていることを自覚していた⁴⁷。彼らの思考は冷静に機能していたのである。空体語を用いる一方で、実体語で思考していたといえる。その意味では、山本の天秤モデルはあまりに単純であり、当時の日本人の思考を表現する適切な方法とは言えない。

現代社会では、バーチャルリアリティーや仮想通貨が普及している。何が実体であり、リアルであるのかが分かりにくくなっている。ネット社会には、それなりの「リアル」な世界があり、現実の経済や世論に大きな影響を与えている。山本が想定する天秤の世界が今日通用するとは思われない。

4. 「日本教徒キリスト派」とならないために

教会やキリスト教学校、キリスト教社会団体等、日本社会の中にあるキリスト者の集まりが、山本の言うような「日本教」的な人間関係が成立しているかどうかを検証することは、本稿の目的ではない。しかし、内村鑑三の無教会派が儒教的な人間関係の縛りを堅持していたりする例⁴⁸にもあるように、キリスト者だからといって、日本教の影響から全く無縁であるとは言えないだろう。儒教的な人間関係モデルと日本教との関係は、興味深いテーマであるが、ここでは割愛したい。ただ、一つ言えるのは、キリスト教学校でも、非合理的な教育方法を授業で行うこともある。山本は、あるミッション・スクールの教師の例を紹介している。その教師は、聖書の時間に、聖書の真理を「行間からくみとれ！」と指導した、という⁴⁹。言葉のないところから真理をくみ取る態度は、聖書そのものを読むことから逸脱し、自己の勝手な解釈を促す誤った指導に陥るもの、と考えられる。

次に、「日本教徒キリスト派」とならないために必要なことについて説明する。すでに触れている点でもあるが、次の2つの意識を育成する必要があると考える。

第一に、二人称的世界からの脱却である。「俺とお前」の中だけで分かり合えるような、閉じた世界観ではなく、客観的に合理的に対象を認識し、主観的確信のみに頼らない認識力を育成することである。二人称的世界は、自己と他者の区別を曖昧にし、対象と主体の分離を妨げる。その結果、対象にしばられ、自分をそこから引き離すことが困難となる。山本は、「水をさす」ことの意義を唱えているが、自分の信念に凝り固まって、熱くなりすぎると、客観的に冷静に対象を分析する視点が曇らされる。水をさすことによって、その熱さを覚ます必要があるのである。戦時中にも、合理的に考えることのできた日本人は存在したが、彼らの声は熱く語る愛国主義者の大声にかき消されてしまった。主体的確信に凝り固まり、自己主張を熱く語る日本教徒ほど、自分を冷めた目で見る、自己相対化の意識⁵⁰は不可欠である。

第二に、歴史意識の育成である。日本の風土に起因していると思われる、何

でも「水に流す」傾向は、インターネット社会において時代錯誤となりつつある。いつまでたっても、データとして残される個々人の言動は、検索エンジンの起動で、容易に再現される時代となったからである。だからといって、日本人の時間意識は、現代社会において大きく変革されるのではないかと期待しているが、まだ、時期尚早であろう。ヘーゲルのような、神の意志を反映したものに限らず、歴史意識は、現在の出来事を過去に照らして解釈し、未来の方向性を見出そうとする態度を育てる時間意識である。前代未聞の出来事が頻発する今日、過去を顧みる態度は無意味のようにも思われる。しかし、時代は異なっても、人間が直面する悩み、困難の本質には共通する点が少なくない。災害、病気、人間関係等、それらの困難を乗り越えてきた人々の知恵は、現在に通用する真理を含んでいる。歴史意識は、その知恵を行動や心構え、態度の原理として解釈するのに不可欠な意識である。

おわりに

自己相対化と歴史意識を身に付けることによって、キリスト者は日本教徒となることから脱することができるであろうか。最後に、キリスト教教育にかかわる人間関係について若干言及しておきたい。

キリスト者であるなしにかかわらず、人間社会の中でグループや派閥を形成し、他を排除する意識は、古今東西問わずどこにでもあるであろう。ただ、日本社会において、比較的強く、先ほど述べた日本教の特徴が表れている、ということが山本の主張であった。キリスト者が、神に関する言葉を持ち、またそれに触れながら神の言葉を実践していくものであるならば、神の前に自分の固定観念や偏見が「くだかれる」経験は少なからずあるはずだと私は思う。これは、自己相対化の別の表現である。このプロセスなく、キリスト者と非キリスト者の溝が広がっていく現場には、「私たちの教会」「私たちの学校」「私たちの園」という、キリストを置き去りにし、謙虚さを忘れたキリスト者が支配するムラ社会が生じてはいないか、常に目を覚ましていなければならないと思う。

常に目を覚まし、冷静であるためには、時間を超越した観点が不可欠である。教会や学校、園などの過去の歴史や建学の精神をたどること、創立の原点にも

どって、創設者の情熱に触れること、さらに今後のヴィジョンを探ることは、現実逃避ではなく、歴史を振り返ることである。このような歴史意識は、日々の業務や奉仕の意味付けを働き人に与える重要な役割を持っていると思われる。

今後、この二つの意識を育成し、磨き上げるためにも、「空気を讀まない」他者の存在が共同体の中には必要ではないか。それによって、「日本教徒キリスト派」から脱することが可能であろう。

<註>

- ¹ 山本本人が経営する書店（山本書店）から、イザヤ・ベンダサンの名前で『日本人とユダヤ人』が1970年に出版された。
- ² イザヤ・ベンダサン（1990）『日本人とユダヤ人』角川書店，p.117,119 山本は、ユダヤ人キリスト者が「ユダヤ教徒キリスト派」となるように、「日本人キリスト者」も「日本教徒キリスト派」になる、と説明する。
- ³ cf. 阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』筑摩書房1996年
- ⁴ cf. 阿部謹也『「世間」とは何か』講談社1995年
- ⁵ 西谷 幸介「学術論文 いわゆる「日本教」について：日本的習合宗教の探究との関連で」東北学院大学キリスト教文化研究所紀要 17号1999年8月（pp.41-73），p.70
- ⁶ 篠井 保彦「神託と予測（18）山本七平の日本教をめぐって」地中海歴史風土研究誌（19）地中海歴史風土研究所（pp.40-45），2004年，p.45
- ⁷ 赤松 宏「西洋と日本の相違：言葉、理論、思想、方法論について（4）」愛産大経営論集愛知産業大学経営研究所（pp.61-66），2004年，p.63
- ⁸ 中島 誠「“日本教”を超えゆく：新たな21世紀をいきるために」第三文明473号（pp.18-21），1999年，p.18
- ⁹ *ibid.*, p.19
- ¹⁰ イザヤ・ベンダサン『日本教について』山本七平訳編 文藝春秋 1984年（1975年初版），pp.302-303, cf. 小室直樹・山本七平『日本教の社会学：戦後日本は民主主義国家にみならず』ビジネス社 2017年（2016年初版），pp.135-136
- ¹¹ 岸本の宗教の定義によれば、「宗教とは、人間生活の究極的な意味を明らかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられている営みを中心とした文化現象である。」という。（岸本英夫『宗教学』大明堂 1996年 p.17）ただし、岸本は、宗教の3類型を示している。①神の観念中心 ②人間の情緒的経験に基づく ③人間の生活活動を中心とする。（*ibid.*, p.16）これによれば、日本教は②

③が中心であるともいえる。

¹² 石黒 圭『日本語は「空気」が決める 社会言語学入門』光文社新書 2017年 p.218

¹³ 多波 まこと『日本教十戒：精神の開国か、滅びか』近代文芸社 1995年, pp.3-4

1. 日本人であるあなたは「世間」と世間の「空気」に従わなければならない。
2. 人はみなタテ（上下関係）につなぎとめなければならない。
3. 所属は一つの集団（村＝共同体＋機能集団）だけにすべし
4. 組織（村＝企業、政治組織）は疑似血縁集団であるべし
5. 所属組織内では「すみません」ですべてが許される
6. あらゆる組織は集団責任体制をとるべし
7. 組織維持のため内部での個人の自由（主体性）は認めない
8. 中身より形式を重んじなければならない
9. 神々は分業して人間に仕えなければならない
10. 以上のおきては言葉と文章にしてはならない

¹⁴ こやま もとい『さよなら日本教』健友館 2001年, p.128

1. 宇宙は全く無秩序な状態から出発したが、ひとりでに秩序のある状態に移行した。
2. 宇宙に存在する全てのものは、宇宙が秩序ある状態に移行していくのに伴って、ひとりでに発生した。
3. 宇宙に存在する全てのものには各々の、宇宙に秩序をもたらした法則が作り出した定められた守るべき秩序がある。
4. 人間には、3に記した守るべき秩序から逸脱できる。
5. 人間以外の宇宙に存在するものは、3に記した守るべき秩序から逸脱できない。
6. 人間の完全な状態は、3に記した守るべき秩序から逸脱していない状態である。
7. 宇宙に秩序をもたらした法則に従うことが、3に記した守るべき秩序から逸脱しないための必要十分条件である。
8. ある人が3に記した守るべき秩序に従っていると主観的に確信できることと、その人が実際に3に記した守るべき秩序にしたがっていることは同値である。

¹⁵ *ibid.*, p.138

¹⁶ *ibid.*, pp.194-200 他にも「言霊信仰の横行」、「前例主義、横並び主義の蔓延」、「規範の主観性の顕在化」を挙げている。

¹⁷ 小室・山本, p.137

¹⁸ イザヤ・ベンダサン『日本教徒』山本七平訳編、文藝春秋 山本七平ライブラリー；14, 1997年, p.14

¹⁹ *ibid.*, p.16

²⁰ cf. 東谷 暁『山本七平の思想：日本教と天皇制の70年』講談社 2017年, p.130

²¹ 山本がしばしば用いる空気の事例に、第二次世界大戦末期の戦艦大和出撃に際しての、三上参謀と伊藤長官の会話である。裸の艦隊（大和）を敵機が跳梁する海に突入させることは、作戦として形を成さない。と三上が思っているにも関わらず、「陸軍の総

反撃に呼応し敵の上陸地点に切り込み、ノシあげて陸兵になるところまでお考えいただきたい」と彼は言った。伊藤はその一言で意味を理解し、議論の対象にならぬ空気の決定であると分かった。伊藤は、「それならば何をかいわんや。よく了解した」と答えたと言う。(ベンダサン (1997), p.13) このような山本の空気論に対し、菊澤は、人間関係の「取引コスト」の観点から反論している。伊藤は、どう考えても成功不可能である非合理的な作戦を周りに納得させる苦勞 (取引コスト) よりも、「沈黙したほうが得」と「合理的に」判断したのであり、その結果「大和は死に場所を与えられたのだ」と考えられる。(cf. 菊澤 研宗「合理的に失敗する組織」野中郁次郎他著『失敗の本質 戦場のリーダーシップ』ダイヤモンド社 2014年, 第11章 所収)

²² ベンダサン (1997), p.23

²³ 東谷 (2017), p.132

²⁴ ベンダサン (1997), pp.46-47

²⁵ 西谷 (1999), p.69

²⁶ 赤松 (2004), pp.61-62、二人称の世界として、恩田木工 (18世紀の信州眞田反の家老) の例が説明されている。彼は、自然災害で藩が財政難に陥った時、債務を一切帳消しにして、財政を立ち直らせた。「裸になって付き合い、何事も腹を割って話し合えれば」(理外の理)、物事は解決すると信じ、実際に解決してしまった事例。

²⁷ イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』角川書店, 1990年, p.96

²⁸ 篠井 (2004), p.42

²⁹ *ibid.*, p.43

³⁰ 小室・山本, p.142

³¹ *ibid.*, p.143

³² 多波 (1995), p.16

³³ *ibid.*, p.17

³⁴ ベンダサン (1990), p.149

³⁵ ベンダサン (1984), p.310

³⁶ *ibid.*, p.174

³⁷ こやま (2001), p.128, cf. 註13

³⁸ 篠井 (2004), p.43

³⁹ ベンダサン (1997), p.200

⁴⁰ *ibid.*, p.197

⁴¹ 小室・山本, pp.155-156

⁴² 浅見 定雄『にせユダヤ人と日本人』朝日新聞社, 1983年, p.75

⁴³ 西谷 (1999), p.52

⁴⁴ こやま (2001), p.138

⁴⁵ 篠井 (2004), p.45

⁴⁶ 1945年9月5日 施政方針演説での発言。(cf. 朝日新聞夕刊連載『新聞と戦争』「写真を処分せよ」シリーズ 2007年6月26日付第8回) 東久邇宮は皇族であり、天皇

の戦争責任を回避するためにこのように述べたと思われる。

⁴⁷ cf. 『きけ、わだつみのこえ』日本戦没学生記念会編 岩波書店、1982年

⁴⁸ 関根正雄によれば、内村が主催する聖書研究会では、「規律は厳格を極め、例えば2回以上の無届欠席は除名するというものであった。」関根正雄編著『内村鑑三』清水書院 1988年、p.112

⁴⁹ ベンダサン (1990), p.124

⁵⁰ 近年、平野啓一郎が主張する「分人主義」は、興味深い立場である。

『私とは何か：「個人」から「分人」へ』講談社 2017年

彼は、たった一つの分けられない (individual) な個人は存在せず、対人関係ごとに見せる複数の顔 (分けられる存在としての人間=分人 (dividual)) が、すべて「本当の自分」である、という。(ibid., p.7)

西南学院大学人間科学部児童教育学科